

# Nara Women's University

## 【内容の要旨及び審査の結果の要旨】 六朝詩歌における空間表現様式

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2017-06-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西川,ゆみ メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10935/4548">http://hdl.handle.net/10935/4548</a>

(別紙1)

論文の内容の要旨

氏名	西川 ゆみ		
論文題目	(外国語の場合は、日本語で訳文を( )を付して記入すること。) 六朝詩歌における空間表現様式		
審査委員	区分	職名	氏名
	委員長		印
	委員		印
内容の要旨			
<p>本論文は、中国六朝期の詩歌における、漢(京都)と胡(辺境)およびその境界域に関する空間表現の様式化とその変容について考察したものである。4世紀初頭、洛陽に都をおく西晋王朝が異民族に滅ぼされ、多くの漢人が中国南部(江南)に移住した。ついで、東晋王朝が建康(今の南京)に再興されると、南遷した漢人が異民族支配下の華北へ戻ることはかなわなくなった。ここに南朝貴族文化が形成される。ところが、南朝の詩人は北方の都(長安・洛陽)および西方の辺境地帯を詩歌に詠うことをやめなかった。南遷後に生まれ、南方の気候風土の中で育った詩人たちが、目にしたことのない北方の地を、先人の遺した文献による知識と自らの想像力によって構築し始めたのである。この詩中の北方空間表現の様式化が進んだ時期を第一の転換期であるとすれば、第二の転換期は六朝末期である。想像上の北方空間が詩人たちに共有されていた梁末、江南は異民族に攻め落とされ、庾信ら南朝を代表する詩人が北方に抑留される。彼らにとって幽囚の地長安は、南朝詩人が憧れをもつてうたった繁華な都ではありえず、従来の語彙・典故の組み換えによって新たな構図が提示される。</p> <p>第一章では、鮑照の「蕪城賦」における廢墟の描写の特質を明らかにする。古城を描くジャンルとしては紀行の賦があり、その地の歴史を記すのが一般的である。だが、「蕪城賦」には歴史が語られず、当該古城を識別する要素が示されない。鮑照は、賦の中に、墓場や辺境を描くのに常用される五言詩の語彙を取り入れ、その荒廢のさまを表現する。墓や辺境の景物など、本来都市の外部に存在するものが城内に侵入しているさまを示すことによって、いずれの都市にも起こりうる「荒廢」を表現するのである。</p> <p>第二章は、魏晋から南朝時期における、辺塞詩歌の表現様式の変容について考察する。南遷以前、辺境の描写の重点は嚴冬の北地の「寒さ」という身体感覚にあった。それに対し、南遷後は秋の情景を描く傾向が強くなり、かつ辺境地域の地理に関する認識があいまいになる。この秋の辺境を描き始めたのは宋の鮑照であり、梁陳の詩人に継承されて、秋の月がのぼる物寂しい辺境の情景が定着していく。これは南朝詩人の想像力が生み出した辺境の情景</p>			

だといえよう。

第三章は、華北の都（長安・洛陽）の表現様式の形成と、辺境と京都という二空間の対比構造を明らかにする。梁代以降、長安と洛陽は春の情景とともに描かれ、もっぱら都城の繁華な様子が表現される。この都と対比的に詠われるのが辺境である。これに先立ち、「胡」（辺境）と「漢」（都）の対偶表現を用いて辺境の兵の悲哀を詠じたのが鮑照であった。鮑照の樂府詩には、「胡」と「漢」が相反する二つの空間として提示され、「胡」（西域）中に唯一存在する「漢」的要素（漢月、漢節、漢思など）が、「漢」（中原）に帰れない人の孤独を印象づける。梁以降、この「胡」と「漢」の対比を下敷きにして、辺境と京都（長安・洛陽）に「秋」と「春」の対比が当てはめられた。さらに、妻が夫を待ち続ける恨みを歌う「閨怨」のテーマを取り込むことで、辺境は男性が従軍する秋の空間、都は女性が男性を待つ春の空間（胡—秋—男、漢—春—女）として描き出されるようになったと考えられる。本章ではまた、胡と漢の対比から王昭君歌辞を読み解き、陳・張正見「明君詞」が、胡と春—女の組み合わせの齟齬によって王昭君の嘆きを表現していることを指摘する。

第四章は、辺境と長安との境界であった「隴」の描かれ方に着目する。「隴」は、六朝以前には単に地理的な指標でしかなく、南遷直後の詩人の作には現れない。一方、民間では、中原から西域に行く旅人が「隴」を涙ながらに越えていく物語をとまなう歌謡「隴頭流水」が流布していた。この「隴」の物語と歌謡をはじめて詩歌に取り入れた詩人はやはり宋の鮑照であり、続く梁陳の詩人たちが、表現に洗練を加えた。これにより、「隴」という詩語は、長安と辺境をつなぐ（手紙を託す）場所であり、故郷長安に思いをはせて望む場所であるというイメージを確立する。さらに、このイメージに改変を加えたのが、六朝末期に北朝に抑留された詩人たちである。特に庾信は、「隴」を「隴頭流水」の物語の大前提である故郷「秦川（長安）」から切り離れた。庾信およびその継承者である江総によって、「隴」は自らの故郷を思いつつ眺める場所というより普遍的な意味を付与されたのである。

第五章は、南から北に移った庾信の「長安」の描き方の変化と、その要因について考察する。南朝の詩人たちは、春の繁華な長安を描き、南朝の都・建康を詠う際にも、しばしば長安洛陽になぞらえた。ここから、南朝の詩人たちが、華北の都に対して憧憬をいだき、西晋以前の北方漢民族文化の継承者としての矜持をもっていたことがうかがえる。庾信の南朝期の作品にも、同様の描き方を認めることができる。ところが、北遷後の庾信は、長安を描くにあたり、辺境に関わる語彙を用いはじめ、「怨歌行」にいたっては、長安を「胡」とする。このことは、庾信が、南朝の詩人たちの間で保持されていた精神的紐帯を共有できなくなったことを意味している。さらに庾信の代表作「擬詠懷詩」では、「関内の人」であることへのこだわりを示す故事を用いながら、自分にとって長安は「関外」なのだと詠う。精神的紐帯を失った庾信は、典故を従来とは逆の意味に用いて、自らの境遇と感慨を表現するのである。

第六章は、庾信の「見征客始還遇獵」および「見遊春人」における表現の特殊性について述べる。この二作品はともに樂府に特徴的な表現やモチーフを用いながら、従来樂府に詠われることのなかった要素を取り入れる。「見征客始還遇獵」は、帰還した兵士を主題としながら、年老いて家も身寄りも失った悲哀を描くのではなく、京都での盛大な狩猟を見た兵士の感慨を詠う。「見遊春人」は春の行楽を主題とし、南朝詩風の繁華な都の表現を多用しながら、都以外の場所での災害を暗示する故事を盛り込む。これらの「見る」詩からは、集団の発想に従わず、「個」の見方を詩歌に投影しようとする、庾信の創作姿勢を読み取ることができる。

以上の考察から、漢人の南遷後、とくに梁代詩人の想像力によって、辺境と都およびその境界域を描く空間表現様式が形成されてきたこと、そこに劉宋の鮑照の樂府詩の表現が用いられていることを指摘した。また、北遷後の庾信が、自ら長安を見、自身の境遇と感慨を詩歌にあらわすため、南朝詩人が共有していた表現様式を覆して新たな構図や題材を探求するさまを示した。

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名	西川 ゆみ		
論文題目	(外国語の場合は、日本語で訳文を( )を付して記入すること。) 六朝詩歌における空間表現様式		
審査委員	区分	職名	氏名
	委員長		印
	委員		印
要旨			
<p>本論文は、中国が南北二朝に分裂していた4～6世紀頃、南朝に生まれた詩人が北方空間をどのように認識し、詩歌の中にいかに表現したのか、その空間表現の様式化と変容のさまを明らかにしようとするものである。</p> <p>4世紀初頭、洛陽に都をおく西晋王朝が滅亡し、北方は異民族に支配された。ついで南方の建康（今の南京）に東晋王朝が成立し、ここに南朝貴族文化が形成される。北方貴族・士族の南遷は詩歌にも変革をもたらした。南方の自然美が発見されて山水詩が誕生したことは広く知られるが、その一方、北方の都（長安・洛陽）および西方の辺境地帯を詠う詩歌も新たに生み出された。本論文で注目するのは後者であり、南方の気候風土の中で生まれ育った詩人たちが、先人の遺した文献による知識と自らの想像力によって、詩歌の中に北方空間を構築していくさまを考察する。</p> <p>本論文は六章からなる。主にとりあげるのは、劉宋の鮑照、梁の宮廷詩人、北周の庾信である。彼らの詩は六朝詩歌史上画期をなすのみならず、次の唐代詩歌にも大きな影響をあたえた。その継承と革新を詩歌中の語彙・典故の用法に注目して丹念に分析した本論は、空間表象から六朝詩歌表現史を構築しようとする意欲的な試みだといえよう。</p> <p>第一章では、鮑照の「蕪城賦」における廢墟の描写の特質を明らかにする。「蕪城賦」には、古城の賦に記されるべき歴史の記述がない。鮑照は、五言詩（古詩や樂府）に常用される墓場や辺境の景物を取り入れ、その荒廢のさまを表現する。これによって、「蕪城賦」は個別の古城ではなく、いずれの都市にも起こりうる「荒廢」を表現する賦となった。従来の「蕪城賦」研究は、制作年代や舞台となった都市の推定が中心であった。それに対し、申請者の論考は、賦の表現に着目して辞賦と詩歌との語彙の交錯を指摘し、あわせて「蕪城賦」の主題の再考も促す好論で、査読をへて『六朝學術学会報』第14集（2013）に掲載された。</p>			

第二章は、魏晉から南朝時期の辺境をうたう楽府について、季節感の変容を中心に論じる。魏晉の楽府における辺境は極寒の冬であった。兵士の身体感覚がリアリティーをもって表現されていたのである。それに対し、南遷後は寂寞たる秋が描かれ、かつ辺境地域の地理認識があいまいになる。この辺境の秋を描き始めたのが、楽府作家として知られる鮑照である。鮑照の辺境を詠う詩歌は、梁陳の詩人に継承され、視覚にうったえる物寂しい秋の情景、胡地で見ると漢の月のモチーフが定着する。これらのモチーフは、後の唐代辺塞詩にも受け継がれており、辺塞詩研究にも裨益する指摘として、高く評価できる。

第三章は、華北の都（長安・洛陽）の表現様式、辺境と京都の対比構造を明らかにする。梁代以降、長安と洛陽はもっぱら春の情景とともに描かれ、西晋の石崇や潘岳の故事を用いて繁華な都の様子が詠われる。象徴的なのは「長安道」「洛陽道」という新たな楽府題が創られたことである。これについては先行研究もあるが、申請者の独創性は、「胡（辺境）」と「漢（京都）」に、「秋」と「春」との対比が重なっていること、さらにそこに「閨怨」（夫を待つ妻の怨み）のテーマが組み込まれていることを指摘する点にある。すなわち、辺境は男性が従軍する秋の空間、都は女性が待つ春の空間（胡一秋一男、漢一春一女）という構図をとるのである。申請者の分析は非常に明快であり、十分に首肯できる。なお、本章ではさらに、胡と漢の対比から王昭君歌辞を読み解き、陳・張正見「明君詞」が、胡≠春一女という組み合わせの齟齬によって王昭君の嘆きを表現していることを指摘する。王昭君歌辞の変遷を論じる研究は少なくないが、同時代詩人の共有する空間表現様式およびそこから逸脱という視点による分析は、極めてユニークなものである。

第四章は、辺境と長安との境界であった「隴」の描かれ方に着目する。南朝詩人に大きな影響を与えたのは、「隴頭流水」という民間歌謡であり、「隴」を超え西域にむかう旅人の物語を伴っていた。この「隴」の物語を宋の鮑照が「擬古」詩に取り入れ、梁代の詩人が「隴頭水」という楽府題を創り出した。これにより、詩語「隴」は、長安と辺境をつなぐ場所、故郷長安に思いをはせて望む場所というイメージを確立する。この形象に改変を加えたのが、六朝末期に北朝に抑留された詩人たちである。特に北周に仕えた庾信は、「隴」を物語の前提である故郷「秦川（長安）」から切り離れた。庾信およびその継承者である江総の詩に至って、「隴」はその先にあるであろう自らの故郷を思いつつ眺める場所という、普遍的な意味を持ちはじめたのである。本論は、漢代から南北朝期の詩語「隴」の用法を丁寧に分析して、その変容の道筋を示しえており、庾信詩研究にも興味深い視点を提供するもので、『六朝学術学会報』第18集に掲載されることが決定している。

第五章は、庾信の「長安」の描き方の変化を追う。第三章に述べるように、南朝詩人は春の繁華な長安を描き、南朝の都・建康をも長安洛陽になぞらえて詠う。ここから、彼らの長安洛陽に対する憧憬、北方漢人文化の継承者たる矜持がうかがえ、申請者はそれを「精神的紐帯」と呼ぶ。南朝時代の庾信もその紐帯を有していたが、北遷後には、辺境をあらゆる語彙を用いて長安を描き、自分にとって長安は「関外」なのだと詠う。精神的紐帯を失った庾信は、詩語や典故のもつイメージを逆用することによって、長安が自身の故郷とはなりえないことを示すのである。

第六章は、庾信の「見征客始還遇獵」詩および「見遊春人」詩の表現の分析から、庾信詩の特異性を指摘する。先行研究によれば、齊梁期の「見」と題する詩は、ほぼ詠物詩に等しく、宮廷詩人の集団創作における題詠の詩だと見なしてよい。申請者は、庾信の「見」詩は、自身の目にした長安を描こうとした詩だという。当該二作品はともに楽府に常用される語彙やモチーフを使いながら、従来にはない要素を含むことによって新たな様相を呈す。例えば、「見征客始還遇獵」は、帰還した老兵の孤独を詠う楽府の常套をはずれ、京都での盛大な狩獵を見た兵士の感慨を詠う。それは実際に北周で行われた過度な狩獵儀礼への庾信自身のまなざしでもある。庾信の「見」詩からは、あえて集団の発想に従わず、「個」の見方を詩歌に投影しようとする創作姿勢を読み取ることができる。

第五章、第六章は、前四章における南朝詩の考察を踏まえた上での庾信論であり、庾信が従来とは異なる観点を詩歌に表現するために、樂府の語彙やモチーフをいかに組み替えて新たな構図を提示したかを明らかにする。庾信は「望郷詩人」とよばれ、境遇に即して詩を読み解く研究が多い中で、申請者はあくまで表現技法上の工夫から庾信詩の個性を見出そうとする。論述にやや粗さはあるが、集団創作によって形成された詩歌空間と、その枠組みを超えようとする詩人の「個」の表出を、詩語によって表象される空間の差異によって読み取ろうとする力作だといえる。

総じていえば、本論文は、魏晋から南北朝にかけての多くの樂府・徒詩・辞賦を丹念に読み解いたうえで、詩語のイメージの形成と詩歌空間の構図の変容を明快に示し得ており、詩歌史に新たな視座を与えるものとして大いに評価できる。惜しむらくは、辞賦と詩歌、あるいは徒詩と樂府とのジャンルの交錯に着目していながら、それを全面的には展開しえておらず、齊梁詩人の鮑照詩受容についても詩語の利用の指摘にとどまり詩歌史における位置づけを示すには至っていない。ただ、これらは今後の研究の発展の可能性を示すものでもあり、ジャンルの交錯をふまえた新たな六朝詩歌表現史の探求が期待されるところである。よって、本学位申請論文は、奈良女子大学博士（文学）の学位を授与されるに十分な内容を有していると判断した。